

フョードル・ロプホーフの アヴァンギャルド・バレエ

早稲田大学 村山久美子

まず最初に、本報告は論者が長年続けているロシア・バレエ史研究の一環であり、とくに、これまでに発表した拙論「20世紀バレエの扉を開けた振付家——ミハイル・フォーキン」『ロシア文化研究』第6号（早稲田大学ロシア文学会 1999年3月）、「革命後のモダン・ダンス波——ニコライ・フォレグゲルの芸術」『現代文芸のフロンティア』（1）（北海道大学スラブ研究センター 2000年3月）、「20世紀バレエ演出の先行者アレクサンドル・ゴールスキー」『ロシア文化研究』第10号（早稲田大学ロシア文学会 2003年3月）、「フョードル・ロプホーフのダンスシンフォニー『宇宙の偉大さ』」『ロシア文化研究』第11号（早稲田大学ロシア文学会 2004年3月）、「カシヤーン・ゴレイゾーフスキー振付演出『美しきヨセフ』」『ロシア文化研究』第13号（早稲田大学ロシア文学会 2006年3月 掲載決定）と並んで、20世紀初頭のロシア・バレエのモダニズムを探る研究の一環となっていることをお断りしておく。

ロシア・アヴァンギャルドの全盛期であった1920年代に、国立ペトログラード・オペラ・バレエ劇場（現マリインスキー・オペラ・バレエ劇場）の芸術監督を務めていたフョードル・ロプホーフ（1886-1973）は、1923年に発表したベートーベンの交響曲第4番によるバレエ『宇宙の偉大さ』で、物語をベースとせず、音楽の構造を分析して音楽そのものを舞踊として視覚化する新しいジャンル、「ダンスシンフォニー」を誕生させた。『宇宙の偉大さ』は不幸にも観客に理解されず、すぐにお蔵入りとなってしまったが（拙論「フョードル・ロプホーフのダンスシンフォニー『宇宙の偉大さ』」参照）、このジャンルは、後にロプホーフの作品を踊ったバランシンの数々の名作によって、「シンフォニック・バレエ」という名で20世紀の世界バレエの主要な流れの一つとなったのである。

ロシア革命後の新しい世界にふさわしい新しい芸術が求められていたこの時期、国立のアカデミー劇場は、それまで長年の間築き上げてきた伝統を守るために、伝統の今後の発展性を証明する必要に迫られていた。ダンスシンフォニーも、20世紀の新しいクラシック・バレエのジャンルとして考案されたものだった。

シンフォニック・バレエの創作の試みと並んで、1920年代にロプホーフが行った実験は、演劇、音楽、美術、映画等の他の分野のアヴァンギャルドの芸術家達の発見を、バレエ作品の中に融合させ

ることだった。このコンセプトで創作されたのが、『プルチネルラ』『氷の乙女』『くるみ割り人形』等々である。ここでは、何枚ものパネルのみを舞台装置として、パネルの移動によって空間を変化させていく構成主義の美術、ジャズやノイズ・ミュージック、ダンサーのクラップやせりふに合わせた踊り、舞台上で移動する照明、サーカスのように複雑なアクロバットなどが用いられた。これらの演出の手法は、メイエルホリドらの演劇の舞台や、小劇場でのダンス公演にまず現れたが、それがアカデミー劇場の大作のなかに巧みに活用されたことにより、バレエ演出の伝統として継承されてゆくことになるのである。本報告では、1920年代のロシア・アヴァンギャルド芸術家の活動が、1930年代以降消滅していったのに対し、ロプホーフがアカデミー劇場の活動として、アヴァンギャルドの実験の成果を、ロシア・バレエの伝統に組み入れた意義を考察する。